



専業ババ奮闘記 (その2) 33

## 木幡智恵美

産前休暇 (5)

定年退職をした後、再雇用でなんとか首が繋がった状態で三ヶ月ほどが経ちました。周りの社員の方達も、私のことを既に定年退職したお爺さんと思っただけで（事実その通りなんです）、殆ど交流がなくなりました。

仕事も手抜きをするようになりました。と、いつても仕事自体を怠けているのではなく、気持ちの手を抜いているのです。それも故意にやっている訳ではなく、そもそも気が乗らないのです。もう四十年もそれなりに世話を焼いたのだから、後は若い人たちに任せればいいや、年寄りが出しやばつても迷惑だろう、そんな感じですよ。精々好々爺を演じようかと思いません。

先日、外注で仕事を依頼している方が久々に来社された折、自分の後任予定の社員を紹介しました。そのとき先方さんに「実は私、九月で定年退職して、その後も再雇用で仕事は続いています」と言うと「えーっ！そうなんですか？もうそんなお年だったんですかっ！」と事のほか驚かれて、こつちが驚いてしまいました。帰り際に再度「いやーっ驚きましたあ」と言っただけでいかれたのには流石に苦笑せざるを得ませんでした。

先頃ネットニュースを見ていたら、女子プロレスラーのダンブ松本さんも還暦で同年代というのを知りました。お元氣そうで「生涯現役を誓った」と記事にありました。女子プロレスラーの年齢など考えたこともなかったの少し意外でしたが、それじゃあちなみに神取忍さんと同じくらいかなあと調べてみたら、あら失礼、まだ？五十六歳でした。そういえば、いつの頃からかよく聞くようになった『心が折れる』という表現を広めたのが神取忍さんだと言われています。二十年以上前のある試合で「(対戦相手の)骨でも肉でもない、心を折つてやると考えてた」と、後のインタビューで答えたのがキッカケのこと。やつぱり怖いんですね、神取さん。

ふと考えるに、今の私も心が折れかけているのではないかと。折れるというか、心がスカスカの骨粗鬆症状態になっているのではないかと気がします。時折、頭の中に綿菓子でも詰まってるんじゃないかと思うことさえあるほどです。『心が骨粗鬆症』というのも自分で言い得て妙だなと思ひ、広まったらいいなと考えるのですが、言い難くて駄目ですかね。

元日の朝、義母は不機嫌で、温めた部屋から出ようとせず、お節や雑煮を準備したのに、初めて家族が揃わない朝食になった。以前は、大みそかから新年にかけての番組を見て夜更かしをしても、朝食には着物姿で現れ、新年のあいさつをして家族揃ってお節を食べたものだ。さすがに九十歳過ぎてからは着物姿ではないものの、年の初めの朝は家族揃っていた。

正月明けに整形外科を再受診すると、ただの打ち身ではなく、圧迫骨折で全治二か月との診断を受けた。相当な痛みだったのだ。レンタルしている介護用ベッドなので、上体を起こしたり、上下に動かしたりできるものの、寝かすのも起こすのも、夫と二人掛かり。日中のトイレなど移動は車椅子、食事は自分でできるが、あとはほぼ全介助の状態になっている。

元日の夕方は、はち切れそうなお腹を抱えた娘が、忠ちゃんと寛大と実歩を連れてやってきた。車椅子に乗ったままの義母も会食に参加。すっかり機嫌が直り、ひ孫たちを眺めながら美味そうにお節を口に入れていた。

三が日が過ぎ、デイサービスが始まると、何とか機嫌を取って、行ってもらおう。ベッドに寝せたり起こしたりは、ベッドの上半分を起こしたり戻したりすることで、一人で介助できるようになった。少しづつではあるが、痛みが軽減してきているように思える。出産までにはもつと楽になつてくれるといいが。

七日、実歩の七五三の写真撮りも無事終えたようだ。「もう、いつ出てもいいわ。引つ越しの荷物もあらかた片付いたし、写真も撮り終えたし」と、娘。こつちは、気が気ではない。義母は、百歳という年齢もあって、襖を叩いては、「何で、こげん背中が痛いかいね」と度々聞く。その都度、「背骨の上から三番目の骨がべしゃんと潰されたようになって、それで痛むんですよ」と繰り返す。この生活に、孫たちの世話が加わるのだ。

「破水してね、今から忠ちゃんに乗せてもらって病院に行くけど、寛大と実歩が寝てるけん来てくれん」の連絡が入ったのは、日付が変わろうとする十三日の深夜のことだった。

30代フリーター やあ、ジイさん。アメリカで陰謀論が勢いづいている。

年金生活者 背景にはマスメディアの地位の低下がある。情報の真偽を分ける物差しを新聞やテレビは独占できなくなった。インターネットの普及でいくつもの物差しが出現し、その中にはフェイク情報や陰謀論を「真」と判定する物差しも存在する。

30代 マスメディアの力は今までそんなに強かったのか。

年金 科学を原動力のひとつとして誕生した近代社会は、合理性を真偽判定の第一の物差しとした。それまであらゆるものの物差しだった宗教は唯一の物差しではなくなり、おもに個人の心の問題の物差しに後退した。

マスメディアは、信仰や教義ではなく、事実に基づく情報を発信する。合理性を物差しとするこの態度が、新聞やテレビを情報の真偽を判定する物差しの占有者の地位に押し上げた。

社会の科学化と呼んでもいいようなテクノロジの発達は、宗教から合理的

の中にはいない。だから、陰謀の主体の存在に思い至らない。全知全能の唯一神の支配するところでは、それに対抗するサタンの存在が信じられているように、強大な主体の存在をたやすく想定しやすい。

30代 もうひとつは？

年金 アメリカは大統領選に見られる通り各州が準国家とっていいほどの力を持っている。連邦政府は中央集権国家にくらべると、それ自体で自立する度合い、自己完結の度合いが低い。自立度、自己完結の高さは近代国家の特性であり、それは宗教からの国家の解放、キリスト教国家の廃棄によって生まれた。中央集権国家のフランスで政教分離が徹底していることにそれがあらわれている。

アメリカは国家としての自立度、自己完結度が低いぶん、宗教から解放され切っていないと言える。そのため、宗教の力が個人の心の中だけにどまらず、社会に及んでいて、それが進化論など科学を否定する主張を支えてい

性への転換を国家に強いた。ヨーロッパのキリスト教国家は宗教の支えを放棄するほかなかった。それによる権力の弱体化を補うため、国家は分権的な封建制を解体し、中央集権のシステムを築きあげた。マスメディアはその国家の発展とともに成長した。ときには国家の広報係として、ときには国家の監視役として。

30代 その地位が低下したのはどういふわけだ。

年金 国家から権力が個人や企業、国家間システムに分散し始め、第4の権力と呼ばれたマスメディアもそれと軌を一にした。権力の分散は資本主義の高度化とテクノロジの発達が加速する富の稀少性の縮減がもたらしたものだ。マスメディアの権力もその一部が

国家と同じ分散先に移った。インターネットがそれを技術的に可能にした。

30代 それが陰謀論の流行に直結するとは思えないが。

年金 国家からの権力の分散は一面で中世への回帰でもあるから、宗教の復

る。陰謀論はそうした土壌から生まれる。

30代 ふだん「陰謀論」を馬鹿にしている男が、ほれた女につれなくされて、「きつと悪い男に引っかけられて、脅されているのだ」と、「陰謀論」めいた妄想を抱くのはありそうだな。

年金 それが当人にとって苦しさをしてのぐのに必要な妄想だとすれば、陰謀論もまた私たちの社会が困難さをしの

活をとまなう。中世そのままではなく、カルトやスピリチュアルや陰謀論の形を取つて。

陰謀論は昔の神話に相当する。当時は神話は当たり前の話として扱われていた。「Qアノン」というトランプの支持勢力は、民主党の政治家らが悪魔崇拝の「ディープステート（闇の政府）」を形成し、児童買春や人身売買に関わっているという「神話」を当たり前のこととして信じている。

30代 陰謀論が特にアメリカで盛んなのはなぜだ。

年金 ふたつ思いあたる理由がある。ひとつは一神教の国であること、もうひとつは国家が分権的な点で中世的であり、そのぶん宗教が社会に強く根を張っていることだ。

一神教が陰謀論を生みやすいという推定は、多神教の日本では陰謀論がそれほど盛んでないことを考えると、納得しやすい。陰謀論が成り立つには、陰謀を実行する強大な主体の存在が前提となる。そんな主体は八百万の神々

ぐために生み出した想念とみなすことができる。その非科学性、非合理性は、日常生活に支障をきたすどころか、日常生活の支えになる。

陰謀論が非合理的な想念に過ぎないのと同様に、合理的な思考は合理的なだけの思念に過ぎない。ともに限界を有しながら、両者とも人間の心の必然が生み出したものだ。前者に偏れば、個人ならストーリーカーなどに、社会ならファシズムになり、後者に傾斜し過ぎれば、個人は薄情な人物に、社会は競争一辺倒の荒れ野になる恐れがある。

30代 トランプは大統領選でバイデン陣営による大規模な不正があったとする「陰謀論」を流布している。

年金 背景にはトランプの「米国第一」に希望を託さないではいられない大勢の有権者を生み出したアメリカ社会の苦境がある。だが、選挙結果はくつがえされない。たいていの男がほれた女につれなくされて妄想を抱いても、ストーリーカーにまではならないのと同じように。

ニュース日記 765  
中村 礼治

## 陰謀論が勢いづく理由